様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２８７４

研究課題名（和文）日本で学ぶ日本語学習者の社会的アイデンティティとことばの獲得と学習者オートノミー

研究課題名（英文）Research on learner autonomy of learners of Japanese as a second language through exploration of learners' voices and identities

研究代表者
中井　好男（Nakai, Yoshio）

同志社大学・日本語・日本文化教育センター・助教

研究者番号：６０７０９５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本語を第２言語として日本社会を生きる人々の日本語学習の様相と主体性である学習者オートノミーを社会的文脈から捉えようとするものである。また、研究協力者の経験をまとめたライフストーリーをもとに、日本語学習教材のプラットフォームを作成することも目的としている。本研究の結果、社会参加を可能にするのは、所属したいコミュニティで用いられることばの習得であり、学習者オートノミーは、学習者が周囲にある人やモノを活用することで、ことばを獲得し、自己を確立しようとする主体性であると捉えることができた。研究協力者の経験は日本語学習や外国人支援のリソースとして活用できるようホームページを作成し公表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
質的研究法を用いて、日本語学習や学習者の主体性である学習者オートノミーを社会的文脈から捉えることによって、日本語や日本語学習にまつわる事象は、外国人に焦点当てるだけでは不十分であり、手話を用いるろう者やその家族の日本語使用や日本社会への参加とその主体性をも視野に入れるべきであることが明らかとなった。その結果から、今後の日本語教育が取り組む課題は日本社会に根付く音声日本語ネイティブスピーカリズムであり、音声日本語以外の言語を母語、あるいは 第一言語とする人々が有する日本社会における権利と自由をどのように保障していくのかという点から再構築するべきであるという示唆を得ることができたと言える。

研究成果の概要（英文）：This research explores how L2 users of Japanese living in Japan learn Japanese language, and how learner autonomy is promoted in the social context around them. Moreover, this research aims to produce life stories of L2 users, which are rich descriptions of their experiences in Japan, and to create a website as a platform of learning Japanese. The results show that appropriating voices enables them to participate in Japanese society and that the exercise of learner autonomy, enabled by contextual affordances, leads to the construction of social agency in Japanese society. Although the life stories have been published online, the potential of the resource to enhance Japanese learning and support foreign residents still needs to be examined.

研究分野：日本語教育

キーワード：学習者オートノミー　社会的アイデンティティ　社会的行為主体　バイカルチュラリズム　音声日本語ネイティブスピーカリズム　コーダ（CODA）　ナラティブインクワイアリ　ライフストーリー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

言語学習者の能力は、「言語のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）」といったコミュニケーション能力に基づいた記述と言語学習を管理する能力（Holec, 1981）である学習者オートノミーによって記述される。この学習者オートノミーという概念は、現代社会が生活の質を重視するようになったことに加え、それを保障する手段の１つとして生涯学習の必要性が高まったことなどがその背景にある。言語教育で用いられる European Language Portfolio は学習者オートノミーに基づいており、日本語教育においても活用されている。

学習者オートノミー研究は、次の３つのレベルで行われている。１）学習場面における対話に着目したミクロレベル、２）社会的アイデンティティ（Riley, 2007）の構築に着目したメゾレベル、３）言語政策といった制度的側面に着目したマクロレベルである。学習者オートノミーは全てのレベルにおける要素と複雑に絡み合っているが（青木, 2011）、それぞれのレベルで学習者オートノミーを捉えるに留まっているのが現状である。

本研究を開始するまでに報告者は私留学生や者護師・介護福祉士候補者の日本語学習場面、外国人就労者のアイデンティティ構築というミクロおよびメゾレベルでの学習者オートノミーに関する研究を行ってきた（中井, 2015; 2016; Nakai, 2016 など）。これらを総括すると、学習者オートノミーは、より能力の高いロールモデルとなる他者による支援や、学習者の過去の経験や将来像を見据える形で日本語話者としての自己の確立を目指そうとする中で日本語学習が起こることが明らかになっている。特に、自己の確立は目標言語社会のコミュニティにおける社会的アイデンティティの実現によってもたらされるものであり、バーガー＆ルックマン（2008）によれば、アイデンティティは意味ある他者の役割と態度をことばを通して自己に内在化することで構築されるという。つまり、日本語を第２言語として日本社会に生きる人々は、意味ある他者との社会的交渉を通じて彼らの役割や態度を表すことばを習得することで、日本社会における第二言語話者としてのアイデンティティを構築していくと考えられる。したがって、学習者オートノミー研究は、日常生活での社会的交渉に迫り自己確立を可能にする社会的アイデンティティとそれを支えることば」に着目していく必要があると言える。

２．研究の目的

以上の背景から、本研究の目的を、日本語を第２言語として日本社会を生きる人々の「ことば」の習得と社会的アイデンティティの構築、さらにはその原動力となる学習者オートノミーを社会的文脈から捉え、日本語教育と学習者オートノミーの育成のあり方について再考することとした。具体的には、学習者が獲得した社会的アイデンティティはどのようなコミュニティにおいて表出するものであるのか、また、それを獲得するために必要となることばとはどのようなものなのかを探るとともに、第二言語話者としての自己の確立を促す学習者オートノミーがどのように発揮されるのかを社会的文脈やことばの獲得と関連付けて構築する。さらに、学習者のライフストーリーをコミュニティ・社会的アイデンティティ・ことばの３つに注目しながら日本語学習教材としてリライトし、教材としての実用性を検討するとともに、日本語教育における学習者オートノミー育成のあり方についても再考する。

３．研究の方法

まず、学習を捉えるには教室の中の様子だけではなく、教室外の経験についても目を向けるべきであるため（Ushioda,1996）、日本語学習者および使用者の経験を聞き、理解し、それをまとめる方法を採用した。具体的には、Narrative inquiry（Barkhuizen, Benson and Chik, 2014）という手法である。この手法は単なる聞き取り調査ではなく、聞き手と話し手が継続的な対話を行うことがその特徴として挙げられる。本研究での対話のテーマは日本での経験であるが、この経験という記憶は他者との対話の中で語られ、作り上げられるものであり（ガーゲン, 2004）、過去をいま、ここでの語りを通して組み立てられていくと考えられる。この経験についての継続的な対話を進めることで、相手の経験を理解するだけではなく、対話に参加する両者に自身の経験やその背景にある先入見を見直す自己の再解釈がもたらされる。この自身の過去の再解釈は、自己変容につながることもある（バーガー＆ルックマン, 2008）。つまり、Narrative inquiry で起きていることは、語り合いという対話を通して他のテキストを新しいコンテキストにおいて意味付けをし直すことである（バフチン, 1998）と言える。このように継続的な対話で得られた対話のデータを文字化し、それぞれの経験を両者の解釈を交えたライフストーリーとしてまとめた。本研究では 12 名の研究協力者にそれぞれ１時間程度の対話を３回以上行った。実際に行った作業としては、対話を行うたびに文字化し、その文字化を用いてライフストーリーを作成した。作成されたライフストーリーは次の対話時に協力者とともに精査していくという形でライフストーリーを完成させた。

さらに、この Narrative inquiry は、報告者自身の過去、特に自身の置かれてきた言語環境についての内省を深め、自己内対話とそれによる自己の捉え直しを引き起こし、CODA（Children of Deaf Adults）であるという自身の言語的マイノリティとしての経験に目を向けさせた。そ

のため、自身の経験を探るためにオートエスノグラフィを取り入れ、報告者自身の経験と、同様の環境にある研究協力者の経験を解釈し、ライフストーリーとしてまとめるとともに、日本語を第２言語として日本社会を生きる人々の経験の再解釈を行った。これについては研究協力者と 1 回 90 分程度の対話を計 5 回行い、報告者と研究協力者それぞれのライフストーリーを作成している。

４．研究成果

分析の結果、昨今急増しているソーシャルネットワーキング（以下、SNS）が持つ新たな学習の可能性や地域方言などの日本語が持つ多様性が第二言語話者の社会的アイデンティティと関連していることなどが明らかになった。次に、いくつかの事例を紹介する。

（1）まずは、SNS における日本語の実践に関するもので、動画などの共有サイトであるニコニコ動画や読書に関する情報提供やコミュニティの作成が可能な読書メーターなどを用いた学習経験についてである（中井,2018b,2020; Nakai,2020）。ニコニコ動画を用いた学習者 A さん（仮名）は、家庭の経済的な理由から、学習塾のようなフォーマルな日本語学習ではなく、関心を持って見ていたニコニコ動画を用いインフォーマルな形態で日本語学習に取り組んできた。A さんはゲームの攻略方法を紹介する実況動画や生放送の中から自身の日本語レベルに合うものを選択し、漢字や Google 翻訳を駆使して画面上を流れるコメントの意味を類推することで日本語を理解してきた。また、それと同時に、A さん自身もコメントを発信したり生放送の放送主として話をしたりすることで、日本語の産出も行ってきた。A さんの動画や生放送では、視聴者が A さんが話す日本語について言及することがあり、それを反省材料として自身の発話を見直し新たに動画作成や生放送を行うというプロセスを繰り返してきた。A さんにとって、ニコニコ動画というプラットフォームは、自身の日本語レベルに合った動画や生放送が見られる日本語学習リソースの保管庫であると同時に、ゲームに関連した実践を通して日本語が習得できる実践共同体となっており、バーチャルなセルフアクセスラーニングスペースとして機能していることが分かる。また、A さんは生放送のロールモデルとしていた放送主が住んでいる台湾にある大学に留学した後、そこから交換留学生として来日し、ニコニコ動画に関するサークルでイラストを担当するなど、日本語話者として活躍してきた。つまり、オンライン上のものであるニコニコ動画は、バーチャルな空間だけではなく、A さんの現実世界にも変化をもたらしており、A さんの学習者オートノミーは、バーチャルな世界と現実世界の両方において日本語使用者としての A さんを位置付け、社会的行為主体を作り上げる力として発揮されてきたことが明らかとなった。オンライン上のコミュニティが現実世界にもたらす影響については、読書メーターを用いて学習した B さん（仮名）の経験にも見られている。B さんは読書メーターを用い様々なユーザーとオンライン上で日本語を用いた交流を行うことで日本語の表現を学びとっていたが、オンライン上の交流の広がりを経験したことをきっかけに、実際に読書愛好家が集う喫茶店に出向き、見知らぬ人と文学について語り合うようになるなど、現実世界においても第二言語話者としての自己の拡張を主体的に行うようになっている。つまり、学習者オートノミーは、所属しようとするコミュニティに積極的に働きかけ、そこでの社会的アイデンティティを構築することで第二言語話者としての自己の確立を促す原動力になっているということが言える。

（2）次に、日本を「移動」することで各地方の方言を身につけてきた日本語使用者 C さん（仮名）の経験の分析である。C さんの経験の分析から、日本語が持つ多様性と第二言語話者の社会的アイデンティティの構築の様相が明らかになった。さらに C さんの経験は、地域方言という日本語が持つ多様性の意義を改めて浮き彫りにしている。幼いころから言語に関心を持ち、いくつかの言語を学んできた C さんは、出身地であるイギリスから地理的に遠く、全く知らない言語に挑戦したいという気持ちで JET プログラムを通じて来日した。来日後は鳥取、福岡、長崎と日本国内を「移動」し、いったん帰国した。大学教員として再来日した後は、千葉から関西に「移動」し、Learning Advisor として言語学習支援に携わっている。C さんの経験を分析した結果、自己の経験を表すことばとして、また、人間関係を戦略的に築くための手段としていくつかの方言が使われてい ることが分かった。C さんは「いい」と言うときに九州地方の方言である「よか」を用いるが、それは「よか」でなければ「いい」という感情が表せないからだと述べている。その他にも、さまざまな方言を織り交ぜた日本語使用するが、方言は周囲の日本人と同様に、「考え方、その感覚が自分の中にもできて」いることを感じさせるものであるだけではなく、それぞれの地域で暮らした経験を示す「髪型」や「洋服」であり、「自分の日本の経験を自分の人生を表すも」のであると語っている。C さんは、方言を使うことによって、地域に在住していた時はその地域のメンバーとして、現在は日本での多様な経験を有していることを示す日本語ユーザーとしてのアイデンティティが作られていることが分かる。さらに、C さんは人間関係や場面に合わせて方言だけではなく文体も使い分けている。例えば、子どもと話すときや学習アドバイジングの場面では、あえて子どもや学生が使う方言を用い、より近い関係性を築こうとする一方で、大学の会議といったフォーマルな場面では「ちゃんと仕事できる」「ちゃんと頼れる大人」であり、「日本語話せない」「変な外人」ではないということを示すべく、標準語を用いるようにしているという。

さらに、C さんは、外国語として日本語を眺めたときに、日本語が多様性を持っているとい

うことは、それ自体に興味がそそられるだけではなく、それだけ人の生活や文化も多様であること示していると語っており、地域方言に対する肯定的な態度を示している。このように、地域方言が日本社会を生きる一人の人として社会的アイデンティティを構築する上で欠かせないことばであるというCさんの経験は、日本社会への参加を目指す日本語教育において、日本語が持つ多様性に改めて目を向ける必要性を示しているのではないかと考えられる。

（3）最後に、結婚を機に日本に移住した女性Dさん（仮名）の経験と筆者のコーダ（CODA: Children of Deaf Adults）としての経験から考えるバイカルチュラルな視点と日本におけるネイティブスピーカリズムの問題である。まず、D さんは自身の経験を振り返り、次のように分析をしている。来日当初のDさんは、日本社会では「名前もない、 韓国から来た女」であり、キャリアや人間関係を築いていくことで日本社会に溶け込もうとしていた。しかしDさんは阪神大震災後の避難生活の中で、震災によって破壊された社会関係を再構築する過程に参加することで、「何人（なにじん）何人（なにじん）という垣根がなくなり、ともに生きる人」として自身を位置付けるようになった。そして、それ以降Dさんは、韓国語という言語資本を用い、社会貢献に取り組むようになったが、その中で出会った抑圧された韓国人女性たちとの交流を通じて、日本社会には日本語ネイティブスピーカリズムが深く根付いており、日本語ネイティブではない人への排他的な社会構造の維持にCさん自身も無自覚に加担していたことに気が付いたという。このDさんの経験については、対話の中で報告者自身にも同様の経験があることが分かった。それは、両親の聴覚障がいのことで報告者自身も障がい者として同一視されているような接し方をされてきたことから、日本の社会は手話ではなく音声日本語用いる聴者のものであると捉え、自身が持つ文化的ろう者の部分を否定し聴者の世界である音声日本語社会に同化しようとしてきた経験である。

本研究の分析では、以上のような様々な経験を記述することができた。これにより、日本語を第二言語として生きる人々の学習や学習者オートノミーという主体性は、社会文化的な視点なくしては捉えきれないものであると同時に、日本語教育は彼らの学習や主体性といった権利と自由をどのように保障するのかという課題に取り組む必要があることが示唆されたと言える。この点において、日本語教育はまだまだ遅れを取っていることは指摘するまでもないだろう。本報告書で挙げた例では、IT技術の進歩に伴ってJFL（Japanese as a foreign language） 環境にある外国人であっても、まるでJSL（Japanese as a second language）環境と同様のバーチャルな環境に身を置き、日本語を用いた実践を行うことが常態化していることが窺える。また、日本語が持つ多様性が日本への移住者の社会的アイデンティティをもたらす源泉となっていることに加え、音声日本語ネイティブスピーカリズムがはびこる日本社会への同化という形で日本語学習が進められている現状も示されている。本研究ではこれらを広く知ってもらうためにホームページを作成し協力者の経験を掲載しているが、まだその教材としての実用可能性については今後の課題として残っている。本研究で得られた示唆は、様々な境界がますます薄らいでいく現代社会において、音声日本語を軸に据える言語観やコミュニケーション観によって作られる日本社会を変革するためにも、上記のホームページの実用可能性も含め、日本語教育に何ができるのかを引き続き検討していかなければならない。

【参考文献】

青木直子・中田賀之（2011）「序章　学習者オートノミー：初めての人のためのイントロダクション」青木直子・中田賀之（編著）『学習者オートノミー：日本語教育と外国語教育のために』（pp. 1-22）ひつじ書房.

中井好男（2016a）「日本語学習と学習者の世界をつなぐ Facebook―フィリピン人介護福祉士候補者による自律的な学習の取り組みから―」日本のローマ字社（編）『ことばと文字―国際化時代の日本語と文字を考える 6』（pp. 73-80）くろしお出版

中井好男（2015）「ピア・リスニングにおける中級日本語学習者の学習者オートノミーの促進―ピアの援助や相 互作用の観点から―」『JALT 日本語教育論集』13, 1-18.

バフチン, M. M.（1998）「人文科学方法論ノート」新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛（訳）『ことば　対話　テキスト（ミハイル・バフチン著作集 8）』新時代社.

P. L. バーガー・T. ルックマン（2008）『知識社会学論考現実の社会的構成』山口節郎（訳）新曜社.

Barkhuizen, G., Benson, P., & Chik, A. (2014). *Narrative inquiry in language teaching and learning research*. New York: Routledge.

Holec, H. (1981). *Autonomy and foreign language learning*. Oxford: Pergamon press.

Nakai, Y. (2016). How do Learners Make use of e space for self-Directed l,earning? Translating the past, Understanding the present, and Strategizing for the Future, *Studies in Self-Access Learning Journal, 7* (2), 168-181.

Riley, P. (2007). *Language, Culture and Identity: An Ethnolinguistic Perspective.* London: Continuum.

Ushioda, E. (1996). *Learner autonomy: the role of motivation*. Dublin: Authentik.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 中井好男	４．巻 9(2)
２．論文標題 ニコニコ動画が持つバーチャルなセルフアクセスラーニングスペースとしての機能に関する考察～香港出身の日本語学習者の言語学習史をもとに～	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Studies in Self-Access Learning Journal	６．最初と最後の頁 179-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中井好男	４．巻 30
２．論文標題 社会的文脈から日本語学習と学習者オートノミーを捉える試み ―日本で働く中国出身者の学習経験についてのライフストーリーをもとに―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 阪大日本語研究	６．最初と最後の頁 93-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中井好男	４．巻 17
２．論文標題 ことばの市民として日本で生きる韓国人女性の生の物語―レジリエンスと行為主体性を生成する言語文化教育へ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語文化教育研究	６．最初と最後の頁 277-299
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.14960/gbkkg.17.277	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 NAKAI, Yoshio	４．巻 なし
２．論文標題 Enhancing the virtual and real-world of a language learner through SNS: Eva’s language learning using Niconico Douga	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Whose Autonomy? Voice and Agency in Language Learning: Selected Papers from the 2018 Independent Learning Association Conference	６．最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中井好男	４．巻 17
２．論文標題 日本社会を生きる言語的マイノリティの経験から考えることばと学習者オートノミーと社会的行為主体	５．発行年 2020年
３．雑誌名 同志社大学日本語・日本文化研究	６．最初と最後の頁 75-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計20件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 中井好男・丸田健太郎
２．発表標題 音声日本語社会が生み出すダブルバインドに関する試論―見えないマイノリティによるコラボラティブ・オートエスノグラフィーを通して―
３．学会等名 2019年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 北山夕華・中井好男・西尾雄志・蓮見二郎
２．発表標題 シティズンシップ教育研究の語られ方・語り方
３．学会等名 シティズンシップ教育研究大会2019（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 NAKAI, Yoshio
２．発表標題 Learner autonomy mediated by a social networking site for Japanese novel readers
３．学会等名 14th Nordic Workshop on Developing Learner Autonomy in Language Learning and Teaching,
４．発表年 2019年

１．発表者名 中井好男
２．発表標題 日本語教育における自己と他者の存在に関わる質的研究の意義とは―「なぜ」という視点からの内省をもとに―
３．学会等名 2019年度日本語教育学会九州沖縄支部集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 丸田健太郎・中井好男
２．発表標題 「音声日本語」と「手話言語」のバイリンガルな視点から見る日本社会の単一言語思想―手話言語法制定を前にして―
３．学会等名 日本言語政策学会（JALP）第21回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中井好男
２．発表標題 日本社会でことばの市民となった韓国からの移住者の苦悩と幸福な生についての語り―TEMを用いたレジリエントな主体性の形成過程の分析―
３．学会等名 言語文化教育研究学会第５回年次大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中井好男
２．発表標題 ニコニコ動画のゲーム実況への参加過程における日本語学習者の言語行動
３．学会等名 2018年度 「『具体的な状況設定』から出発する日本語ライティング教材の開発」 公開研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 KITADE, Keiko., NAKAI, Yoshi. and HIRANO Rieko
２．発表標題 Recreating beliefs in language teaching/learning through experiences in conducting research on narrative inquiry
３．学会等名 International Society for Language Studies 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中井好男
２．発表標題 音のある社会と音のない社会を生きる―自己の再解釈を通して知るバイカルチュラルな経験―」
３．学会等名 同志社大学シンポジウム「日本社会を生きるとは―ことばとオートノミーと社会的行為主体―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 NAKAI, Yoshio
２．発表標題 Native Speakerism in the Context of Japanese Language Teaching: Exploring An Experience of Non-Native Teacher Identity in a Korean Teacher of Japanese
３．学会等名 Language, Identity and Education in Multilingual Contexts (LIEMC19)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中井 好男・脇坂 真彩子
２．発表標題 アプリやSNSを活用した自律的な日本語学習
３．学会等名 JASAL 2018 x SUTLF 5
４．発表年 2018年

１．発表者名 中井好男・丸田健太郎
２．発表標題 「ろう文化」と「聴文化」のバイカルチュ ラルな視点から見る言語教育とは― 複線径路・等至性モデルによる「コーダ」 と「ろう者のきょうだい」が持つ言語教 育観の探索―
３．学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田祥平・中井好男・八木真奈美
２．発表標題 日本の地域社会を移動する日本語非母語話者 と地域方言の関係性―「現代日本社会における多 言語化」論を視野に入れつつ―
３．学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡田祥平・入山満恵子・中井好男
２．発表標題 国語辞典の意味記述と社会状況の変化―「聾者」とその関連語の場合―
３．学会等名 第43回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 NAKAI, Yoshio
２．発表標題 Learner autonomy as socially constructed agency: Eva’s language learning history
３．学会等名 Independent Learning Association Conference 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中井好男
２．発表標題 現代日本の「多言語」状況を生きる第二言語使用者の言語使用とアイデンティティ
３．学会等名 2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 NAKAI, Y. & Thornton, K
２．発表標題 L2 identity construction and translanguaging: A narrative analysis of the role of dialect
３．学会等名 Psychology of Language Learning 3 conference 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 NAKAI, Y. & Thornton, K
２．発表標題 Regional Dialects and Second Language Identity: A Narrative Inquiry Approach
３．学会等名 the APLX 2017 International Conference on Applied Linguistics（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中井好男
２．発表標題 ニコニコ動画のゲーム実況プレーヤーという私の実現 ～日本語学習者の言語学習史に関する調査から～
３．学会等名 日本自律学習学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 NAKAI, Yoshio
２．発表標題 Autonomy learner as a complex system to integrate into a Japanese society
３．学会等名 13th Nordic Workshop on Developing Learner Autonomy in Language Learning and Teaching: Living Autonomy Identity, Diversity and Multilingualism
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 青木直子、マシュー・バーデルスキー（編）	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 印刷中
３．書名 日本語教育の新しい地図―専門知識を書き換える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ「日本社会を生きるとは―日本語を学び、日本語を使って生きる人々との経験を読む」https://livinginjapan.me/

同志社大学シンポジウム『日本社会を生きるとは-ことばとオートノミーと社会的行為主体-』
https://www.doshisha.ac.jp/event/2018/1227/event-detail-3304.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	奥　優伽子 (OKU Yukako)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	青木　直子 (AOKI Naoko) (20184038)	大阪大学・文学研究科・教授 (14401)	
連携研究者	中山　亜紀子 (NAKAYAMA Akiko) (20549141)	広島大学・人間社会科学研究科・准教授 (15401)	